

満月句会（お団子を食べながら後の月を愛でる句会）

2019年10月14日 17:30～19:00

於：同志社女子大学今出川キャンパス 純正館5階 天候：曇

評者：本学嘱託講師 塩見恵介先生

十三夜ほんたうじゃないことも好き 綾那

十三夜の月の光はすこし異次元な感覚に近づけてくれそう。普段は研究や仕事に明け暮れ、リアルなものに身をおく参加者にとって本当でないこと、虚の世界に身を置く快さを体感できる句会として定着すれば良いですね。

香水を枕にひとつ十三夜 祐子

香水は夏の季語ですが、これはちょっと快眠のための香水でしょうか。不思議と秋の月と香水はあいますね。僕も若い頃の句で「シャネル・ココ去りゆく路地や寝待ち月」という句を作ったことを思い出しました。

十三夜ミュシャの円環見つめをり 恭子

今行われている美術展、2019年の今日の日を俳句に仕立ててくれました。円環をみつめることと十三夜のちょっと欠けた月の取り合わせが見事。十三夜の月はちょっと欠けながら、満月に近づく期待をこめられる素敵な月。今をこんなふうに素敵に品良くあしらう玄人の俳句の世界、誰でしょう？同女俳句にこんな作家がいたなんて！

今一人あなたを想う十三夜 志織

あなたとはきっと素敵な恋人でしょう。月の夜に素敵な恋の思いに浸る。古今東西、これは共通感覚。こうして考えると十三夜という季語は女性の得意なテーマかもと思います。

夢なのか出会ってしまった十三夜 美菜穂

夢なのか、と言っているのです。出会ってしまったことは至上の喜びの方で考えたい句です。まるで樋口一葉の十三夜のクライマックスのような出会いでしょうか。

十三夜フェンスの向こうに彼は今 つばさ

十三夜のフェンス（金網）の向こうの彼、部活の夜間練習でしょうか。それだけで十分、甘美な世界ですが、「彼は今」と付けられると、作者は見ることがなく彼を想像している。おや？と思う。ひょっとしてこのフェンスは刑務所のようなもの？そして彼は…、ドラマがいろいろできそうな句です。

泣いた日の枝の隙から後の月 祐美

木の間より漏れ来る月の影、和歌世界の景ですが、「泣いた日の」に青春性があります。枝の隙間から見える澄明な月の光、なにか救いのようです。十三夜はセンチメンタルがとてにあう季語だと再認識です。

後の月今日もあなたの姿なし 葉月

十三夜の恋はどうも片思いが良いようです。澄明な月光が空気を浄化させるようで、恋人（あなた）を視線でおい求める気分は少しセンチメンタルに近づいて、心地よい悲しみでもあるよう。きっといつか会える、そんな気分も底に漂っています。

逆上がり大人もしたい十三夜 明子

俳句が思いつかない夜、実はたまに近くの公園に行って鉄棒にぶら下がってます。逆上がり、最近たまに一発目を失敗します。身体が重くなってなまっているのです。大人になれば何でも出来ると思っていた若いときですが大人になりすぎると今度はできなくなることが増えています。この句は精神的に子どもに戻りたい、という句ですが、身体も含めて十三夜は自分を少し昔に帰してくれそうです。

十三夜錆びないように手をにぎる 唯花

「錆びないように」に詩があります。手を握るのは恋人同士でしょう。恋が錆びないように。十三夜、澄明感のある季語に、つなぐ手の静かにひんやりしている中で、その感触はけっして嫌な物でない。

秋陽落ち姥月上がる空の井戸 美月

後の月は十五夜と比較して女名月とか、姥月とか言われます。性差別じゃないか、と女子からは怒られそうな季語だと思うのですが逆に楽しんでもくれる人もいることに自由の空気を感しました。空の井戸、というのが上下を逆にした発想。奥深い秋の夜空の向こうを井戸に見立てています。

神様は今留守です後の月 直子

十月は神無月。そういうことで神様は留守なんですね。ちなみに後の月は旧暦九月。旧暦感覚と、新暦感覚が混ざり合って現代的な俳句かもしれません。作者は博士論文にいま没頭中とか。がんばって！

初寒や芋名月シャツに来し 敬介

初寒の肌感覚がシャツに寄ってくる、ということでしょうが、芋名月もすごく近くに寄ってきている感じ。まるで猫か何かの生き物のように感じる芋名月が楽しいです。「芋名月ややひんやりとシャツに来し」などの改案も出来そう。初寒、芋名月、季語が二つあるのが惜しいのです。芋名月がシャツに来る、ってとても面白い感覚。

少女にはかえれぬと知る後の月 歩里

後の月という季語が一番生かされて作られた句のひとつかもしれません。不可逆的な時間を強く意識した句で、とても青春性が強く繊細。もう少し大人になると、今度はいつでも少女に帰れる時間が来るかもしれません。

十三夜秋風なびくすすきかな 友美

この句も十三夜とすすき、季語が二つあるのが惜しい。月とすすきは典型の世界なので少しズラしてもいいかもしれない。すすきでないものを風になびかせてみるのは手。自分をなびかせてもいいかもしれないですね！

十三夜 TPO を忘れた日 梨沙

十三夜の美しさについつい心が浮かれて、おっちょこちょいな言動をしてしまったよ、という感じ。くつろいだ世界で句会の句らしい句。作者を知ってしまうともっと、のっぴきならない失敗を語ろうとしているのではないか、とも思いますが、十三夜という季語でやはり優しい方向に。

十三夜羽化登仙の此処かしこ 知子

羽化登仙という、素敵な言葉をこの句で教えて貰いました。そんな素敵なお酒の飲み方ができる十三夜をいつか実現したいと思いました。当日はお団子でここかしこに羽化登仙し、話を弾ませている女性グループ。それもまた素敵です。

赤煉瓦女の園に夕残月 ひろし

赤煉瓦は同志社の校舎を示す象徴。赤煉瓦と月光の取り合わせが美しい。女の園ですから、女子大もさして、見事に挨拶句です。夕残月がちょっと難しいか。十三夜女の園の赤煉瓦、ぐらいあっさりとするのも手かもしれない。

今出川若人の影十三夜 康子

十三夜という季語にある数字から、この若者の影は、独りでなく大勢のものという感じ。今出川という地名も入り、今日の満月句会にご挨拶の一句をちょうだいいたしました。若者の影、それだけで詩になります。同女大学生の生活そのものが大人にとってはとても素敵な詩。

夢語る乙女が集う十三夜 寛子

句相撲では、作者みなに、自己紹介をしてもらった場を作りました。現役のみならず、参加者全員がそれぞれがしたいこと、夢、今頑張っていることを語りました。OGや教員含め、みなが乙女の気分で未来を語るすてきな句会となりました。この句もその気分が溢れている記録句です。

一言が言い出せぬま後の月 日出子

句相撲で最後に残った一句でしたが、満場一致で名句と判断しましたね。「一言」は何なのか、恋の告白なのか、謝罪なのか、それとも…。読む人によってさまざまに受け取れる一句でした。後の月の余韻が見事に効いている句です。

さびしさやはなれるあなた名残月 歌菜

名残月、という季語も使ってくれました。名残月の名前を活かし離れる貴方との思い出の余韻が漂っています。さびしさやは言わずもがなで、ここに何か貴方との思い出の具象などを入れるとぐっと句に実感が強まります。

まだ見えぬ秋の寒空のちの月 一絵子

今年の残暑はいつまで…と思うくらいです。まだ見えぬ寒空、実感。それなのにもう後の月の季節。その感興は一同同感でした。秋、寒空、後の月、さまざまな季語が混在するところですが、ほんとうに暦と実感がずれている季節ならではの一句

栗名月ごはん食べたい美味なもの 知佳

栗名月、豆名月…後の月は秋の収穫に感謝する日でも。ご飯食べたい美味なもの、旺盛な食欲をダイレクトに詠む乙女のあっけらかんとした口調におもわず笑ってしまえる句。十三夜という文学的詩情を、と堅苦しく考えないでこんな感じで俳句に親しむ姿勢はとても大事。

十三夜腹八分目で満つるとは 華蓮

十三夜の月は少し欠けている。本当の満月一步手前。その季語の本意を見事に活かして、うら若い女子ならではの食欲と結びつけたこの一句。おおらかなユーモアが素敵。

夢語り願いよ叶えと十三夜 歩美

願いよ叶えと、が力強く、若く素敵な自意識や向上心を見せてくれた一句で気分が良い句です。夢を語りあう世界を考えましたが、作者が強く自分の夢を語っている、そこにフォーカスされた一句だと何度か読むと気づく一句。それぞれがこの思いをもちよった満月句会でした。

杯に白き弧描く二夜の月 萌

色彩も清楚で美しく、景が一瞬で脳裏に浮かぶ一句で見事です。作者はかなり俳句作りにおいている人ではないかしら。デザイン力抜群。

パソコンに座を取られがち十三夜 菜美

パソコンに場所を取られる、仕事にあけくれて十三夜の月の楽しみもままならない、といった現代の都市生活者の一句。切ないけれど、実感で共感者も多い句ではないでしょうか。パソコンの座を取られがち、とすると猫か何かに場を取られているような句に変化して、くつろぎも生まれそう。

走り出す蒼ぞら晴れて十三夜 真由子

走り出す、という出だしの五音に青春性を強く感じます。青空がはれているから昼なのでしょう。十三夜は今宵が十三夜ということですね。時間がずれている感じも気にせずに走る。時空軸のゆがみの中で疾走する一人もまた若さならではの感じます。

我が国の歴史に残る十三夜 侑香

我が国の歴史に残る、というのは十三夜の観月宴のことかと一読の感想。しかし、俳句の骨法から言えば、中七で一度切って読む。前日のラグビー日本代表の快挙を詠んだという作者の弁に納得。森山先生との句相撲は図らずもラグビー句対決で盛り上がりました。一番の話題作でした。

幾年の悲願かなひて十三夜 由紀子

幾年の願いかなひて、それぞれの人に悲願はあって。それを詠み込み収穫物にあふれる十三夜という季語の斡旋が見事。ラグビーの日本代表の快挙に沸く昨今、この句ものちのち読みなおせば2019年令和1年、表象文化学部十周年の年のことを思い出すきっかけになりそうな佳句です。

二夜の月満月句会に欠けたもの 佳奈

さて、欠けたものとはなんだったでしょう。来ていなかっただれかを思ったり、もっとこんなことをすれば、と思ったり。僕は筆ペンをもってきてみんなにせっかくの一句を短冊に残して貰えばよかったなあと思いました。二夜の月という季語ですから、十五夜もこんなふうに見ておけば良かったとも。

後の月表象フェスで結託す 直美

結託す、が面白い。後の月という詩情のある夜ですからよからぬ密議ではなくて、せっかく集まったグループ、今日の楽しさをこれから先、もっといいものにつなげたいね、などと相談する親睦の深まりを感じさせられます。

後の月酒解禁へ踏み出すぞ 美優

20歳前の学生さんらしい素敵で素直な一句。お酒解禁までもう少し、もう少し。我慢しながら、その対象として後の月をこんなふうに見ている人と句会が出来る。なんて素敵な句会。解禁したら、ぜひ酒置飲語の句座をともにしたいもの。

お団子が女子にとっての後の月 真波

花より団子、ではないですが、月と月見団子、まっすぐ迫って女子の共有感覚を詠むおおらかさ。普段の作者の俳句を知っている私としては少し驚いた一句。自分たちを「女子」という表現で述べるところがとても若々しく憧憬する感覚です。

後の月詠んだ後の団子かな 瑞稀

満月句会ではすてきな月見団子があって、一句提出した人からおいしくほおばりました。美味しいお団子があると、会話も弾みます。そんな句会が産んだくつろぎの雰囲気が漂う挨拶の一句。

とりあえず栗名月と書き団子 恵介

照明などの関係で急遽、一般的な句会でなく句相撲をすることにしました。その状況で少しあわてて、考えてきた句が頭の中で消えました。目の前の団子も欲しいし、というとっさの一句で失礼しました。